

# 気管支上皮で内腔を覆われた胃の腸管嚢腫の1症例

奈良県立医科大学附属がんセンター腫瘍病理学教室

遠藤 武弘, 堤 雅弘, 辻内 俊文  
野口 修, 小林 永策, 小西 陽一

奈良県立医科大学第1外科学教室

吉村 淳, 大橋 一夫, 中野 博重

## A CASE OF ENTEROGENOUS CYST WITH BRONCHIAL EPITHELIUM OCCURRING ON THE STOMACH

TAKEHIRO ENDOH, MASAHIRO TSUTSUMI, TOSHIFUMI TSUJIUCHI,  
OSAMU NOGUUCHI, EISAKU KOBAYASHI and YOICHI KONISHI

*Department of Oncological Pathology, Cancer Center, Nara Medical University*

ATSUSHI YOSHIMURA, KAZUO OHASHI and HIROSHIGE NAKANO

*First Department of Surgery, Nara Medical University*

Received March 11, 1994

**Abstract:** A rare case of enterogenous cyst occurring on the stomach is reported. The 28-year-old male, suffering from dysphagia, was admitted to the hospital. Gastric cyst was found and surgical resection was performed. The size of the cyst was about 4 centimeters in diameter, and the cyst showed a whitish gray color.

Histologically, the cyst wall consisted of a mucosal layer covered with ciliated epithelial cells, connective tissue layer and smooth muscular layer. It is suggested that this type of cyst occurred by abnormality of genesis in the gastro-intestinal tract.

### Index Terms

enterogenous cyst, stomach

### はじめに

胃嚢胞とは胃壁内に発生した嚢胞性腫瘍の総称で、Campbell<sup>1)</sup>によると1732年にRuyschが胃皮様嚢胞として記載した症例が、胃嚢胞の最初の報告例とされている。その後、胃嚢胞に関する数々の報告がなされており、中でも、早期胃癌の周辺において、嚢胞状に拡張した胃腺としてみとめられるような小さな胃壁内胃嚢胞<sup>2,3,4)</sup>の症例はかなりの多い。一方、ある程度の大きさを有し、臨床的に問題となる胃嚢胞は極めてまれである。また、胃嚢胞には組織発生の学的にみて多様なものが含まれており、分類に関しては欧米ではPalmer<sup>5)</sup>の分類が、本邦では倉田<sup>6)</sup>、野村<sup>7)</sup>、谷<sup>7)</sup>らにより分類が試みられている

が統一した見解は示されていない。今回我々は胃体上部小弯側にみられた気管支粘膜上皮でおおわれた稀な胃嚢胞を経験したので、その組織発生について文献的考察をまじえて報告する。

### 症 例

患者: 28歳 男性

主訴: 嚥下障害

家族歴: 叔父 膀胱癌

既往歴: 特になし

現病歴: 平成4年10月下旬、嚥下障害が出現したので近医を受診した。腹部超音波検査、種々の画像診断の結果、肝臓と胃に接する腫瘍の存在が指摘された。精査の

ために平成5年1月13日より当大学附属病院放射線科に入院した。その結果、胃体部小弯側の胃壁原発の non-organic cystic tumor と診断され、手術目的で第1外科に転科した。

入院時現症：身重172 cm，体重64 kg，体温36.3℃，脈拍78，血圧106/70，意識障害なし。

検査成績：特記すべき異常所見なし

手術所見：全身麻酔下で腫瘍切除術を施行した。腫瘍は胃体上部小弯側に位置し、直径4 cm，表面は平滑で弾性軟であった。周囲組織との境界は胃の反対側では明瞭で周囲組織との剥離は容易であったが、胃側では不明瞭であり胃壁の一部とともに切除する必要があった。

病理学的所見：

(肉眼的所見)囊胞の外観は、単胞性で直径4 cmの球形であった。色調は全体的に灰白色を呈していた(Plate 1)。剖面は、壁の厚さは1.5 mmで、内腔表面は平滑であるが所々にひだがみられた(Plate 2)。なお、囊胞内腔

と胃内腔との間に交通はみられなかった。

(組織学的所見)囊胞の壁には、内腔側より線毛上皮細胞よりなる粘膜層、疎性結合組織層、平滑筋組織よりなる筋層、漿膜下層、漿膜がみられた(Plate 3)。なお、胃付着側では胃漿膜下層と囊胞の漿膜下層が連続しており、この部では漿膜は欠損していた。囊胞の内腔表面はほぼ一層の線毛円柱上皮により被覆されており、核の異型や大小不同は認められなかった(Plate 4)。以上の所見より囊胞は胃壁より発生した腸管囊腫の1種でその内腔表面を気管支上皮で覆われた稀な症例であると診断した。

### 考 察

胃囊胞の分類については種々のものがあるが、発生機転<sup>2)</sup>による Palmer の分類、倉田の分類や谷の分類、組織学的構造による野村の分類があるが、欧米では Palmer の分類が我が国では倉田の分類がよく用いられている。本症例は Palmer の分類の I 型の prenatal な要因によ

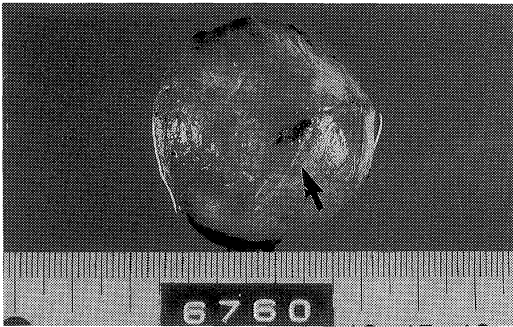


Plate 1. Tumor resected surgically was shown. The surface of this tumor was smooth and a part of stomach was contained (indicating by an arrow) in this tumor.



Plate 2. Cut view of the tumor. A large cyst with thin wall was shown.

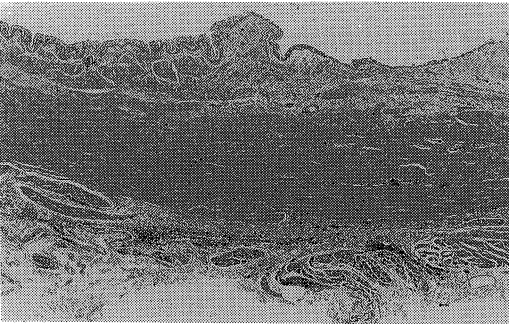


Plate 3. The wall of the gastric cyst consisted of mucous epithelial layer, loose connective tissue layer, smooth muscle layer, and serosa. (H. E. X10)

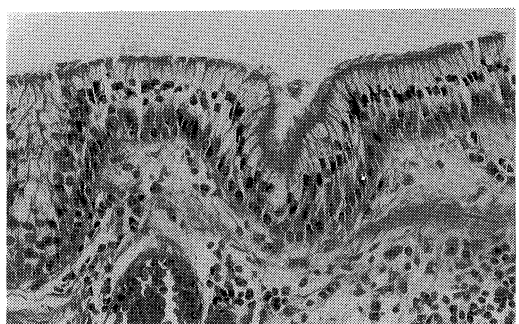


Plate 4. High-magnification view of the mucous layer. Columnar epithelial cells with cilia were shown. (H. E. X 200)

り発生する嚢胞の中に入るものと考えられ、倉田の分類ではII型の Enterogenous cyst と考えられる。豊泉<sup>9)</sup>らは倉田の分類を用いて本邦報告 110 例の成因別分類を行っているが、Enterogenous cyst が 25 %、Glandular retention cyst が 23.6 %、Aberrant pancreatic cyst、Lymphatic cyst とともに 13.6 % であった。本症例は発生機転より Enterogenous cyst と考えられるが、嚢胞内腔表面の全領域を気管支粘膜で覆われた症例の記載はみられなかった。本症例の組織発生は胎生期の發育異常に基づくものと考えられる。上部消化管<sup>10)</sup>は前腸より発生し、胎生 4 週半ばに前腸尾側部の咽頭腸につながる部分の腹側正中中部より呼吸器系へと分化する喉頭気管溝が生じる。この時期、食道は喉頭気管溝とのちに胃になる紡錘形の拡張部とを結ぶ短い筒としてみとめられる。このような発生機転より胎生期の發育異常に基づいて発生する嚢胞性病変の場合、胃<sup>11)</sup>では消化管粘膜で覆われた嚢胞がみられることが多く、食道<sup>12)</sup>では気管支粘膜で覆われた嚢胞が生じることが多い。本症例は嚢胞の壁の内腔表面が一層の線毛円柱上皮より覆われた稀な症例である。この成因として、胎生早期に喉頭気管溝が前腸より生じる前に、呼吸器系の原基の一部が前腸の尾側に迷入した可能性が考えられる。

報告では腸管嚢腫は消化管のあらゆる部分に生じるが特に空腸に多いとされている。肉眼的には円型、管状のものなど種々の形があり、直径 1 ~ 5 cm で腸管膜付着側に多く、通常、消化管との間に交通はみられない。組織学的には平滑筋層を有し、内腔表面は非特異的な消化管粘膜上皮で覆われることが特徴とされ、食道のものでは気管支上皮をみるものとされている。本症例のような腸管嚢腫は消化管重複症<sup>13,14,15)</sup>と呼ばれる病変と発生的には同一のものであり、今後、消化管重複症を含め、胃に生じる嚢胞性病変の分類・用語が統一されその臨床病理学的理解が深まることがのぞまれる。

## 結 語

今回、我々は 28 歳男性の胃に発生した気管支粘膜で内

腔を覆われた稀な腸管嚢腫の一例を経験したので、その組織発生を中心に文献的考察を加え報告した。

## 文 献

- 1) Campbell, A. M. : Surg. Gyne. Obstet. 20 : 66, 1915.
- 2) 野村益世, 平林久繁, 高瀬 俊 : 胃粘膜下嚢腫の一例. 胃と腸 4 : 1229-1234, 1969.
- 3) 望月祐一, 野見山裕次, 王 恒治 : 多発性異所性胃嚢胞の 1 例. 胃と腸 24(9) : 1057-1061, 1989.
- 4) 大和田進, 田久保海苔, ニツ木浩一 : 胃粘膜下多発性嚢胞領域内にみられた IIa 型 早期胃癌の 1 例. 癌の臨床 36(9) : 1019-1024, 1990.
- 5) Palmer, E. D. : Medicine 30 : 81, 1951.
- 6) 倉田 悟, 綱田泰生, 森 文樹 : 胃嚢腫. 日臨外医学会誌. 40 : 70-79, 1978.
- 7) 谷 昌尚, 島津久明, 小堀鷗一郎 : 胃嚢胞の 2 例と本邦報告例に関する文献的考察. 胃と腸 9(8) : 1067-1073, 1974.
- 8) 一柳明弘, 竹田武彦, 松葉光史 : 稀な胃嚢胞の 1 例. 兵庫県医師会雑誌 32(4) : 165-168, 1990.
- 9) 豊泉惣一郎, 小沢弘佑, 鈴木昭一 : 早期胃癌を併存した胃嚢胞の 1 例. 日消外会誌. 19 : 973-976, 1986.
- 10) 織田敏次, 竹本忠良, 丹羽寛文 : 胃腸の病変. 中外医学社, 東京, p4-8, 1982.
- 11) 飯島宗一, 石川栄世, 影山圭三 : 現代病理学大系. 中山書店, 東京, 12 A : p95, 1984.
- 12) 山中 晃, 横山 武 : 肺病理アトラス. 東京文光堂, 東京, p58, 1990.
- 13) 石川正則, 友安敏博, 村下純二 : 穿孔した回腸重複症の 1 例. 消化器外科 11 : 1549-1552, 1988.
- 14) Ladd, W. E. and Gross, R. E. : Surg. Gynecol. Obstet. 70 : 295-307, 1940.
- 15) 原 淳二, 石川恒夫, 武藤良弘 : 高齢者の上行結腸にみられた消化管重複症の 1 例. 臨外. 44 : 1819-1822, 1989.